山と博物館

第５４巻　第８号　２００９年８月２５日　市立大町山岳博物館

神様のつかいに会った

丸山　卓哉

春の星座になるが、からす座がある。闇夜のカラスよろしく、鳥の形というよりも、夜空に居場所を示すように４個の星がいびつな小さな四角形を作っている（写真１　中央の四角い星のならび。左上の明るい星はおとめ座のスピカ）。

カラスは昔、白かったという。高貴な鳥で、太陽の神アポローンに仕えていた。鳴き声も美しく、人の言葉さえしゃべったという。ある日神様のおつかいで泉に水をくみに行った。しかし、途中で好物のイチジクを見つけて食べ頃になるのを待っていたため、そのおつかいに何日もかけてしまった。遅くなった理由を神様に問われたカラスは、泉の水蛇が邪魔をして水をくめなかったと嘘をついた。言い訳は今に始まったものではなく、すべてをお見通しだった神様の怒りをかって、カラスは、色は黒く、鳴き声も綺麗な声から、ただ、カーカーと鳴くだけにされてしまった（お話はいろいろありますが、嘘をついて黒くされたことは基本のようだ）。

写真２－３は、７月に安曇野市内をサイクリング中に妻が見つけたハシボソガラスである。風切羽の一部が白い。はじめは白と黒のめずらしい鳥がいるといわれて、まさか安曇野市にカササギが進出?!とびっくりしたが、それほどパンダではなく、形、大きさはハシボソガラスである。このときは単独で一声も鳴かなかったが、後日再訪すると家族連れで（写真４）、カーカーと鳴いてくれた。

インターネットの検索でも少し引っかかってきて、長野県内では数年前にも千曲川周辺で見かけられているように、時々このようなカラスがいるらしい。全身真っ白なアルビノもいるようだ。

日食に大雨に地震にインフルエンザ等々、なんとも落ち着かないこの夏だったが、神様に少し近いカラスに出会える貴重な体験をした。

（大町山岳博物館友の会会員）

彫刻になった登山風景

―松本白樺工芸の山付登山人形について―

岸田惠理

はじめに

松本には、山岳を背景に登山する人を彫りこんだ登山人形がある（写真1）。この人形を「山付登山人形」と呼ぶことにしよう。この松本白樺工芸の山付登山人形は、黙もくと登山する人と断崖が表現されている。そこには自然に立ち向かって生活圏を確保していった西洋の厳格な自然観に見られる、自然と人間の対立構造は見てとれない。この人形は私見によれば、少なくとも西洋にはない発想によっている。この造形はいったいどこから生れたのだろう。

数件まわったみやげ物店や工芸店の話では、つい最近まで松本白樺工芸の組合があったが、手間の割りにはもうけにつながらず、輸入品の安価なみやげ物に淘汰されてしまって作り手が育たず、現在制作している人はほとんどいないとのことであった。

写真1　山付登山人形
平成　筆者蔵　15.7×6.0×5.0cm

小稿ではまず、松本白樺工芸について概観したうえで、登山人形の成立を跡づけたのち、その成立の背景として西欧の写実表現の受容から名もない山岳風景が作品に現われてくる経過に触れて、日本の伝統的造形の技術と西洋の写実の精神との結合によると思われるこのユニークな立体造形の誕生を導いてみたい。

一　松本白樺工芸の全貌

（1）戦前

松本白樺工芸には、さまざまな形象のみやげ物があるが、発端は白樺を主な材料として木彫をほどこしたもので、山のみやげであった。それは木彫りの登山人形が起源とされている。明治末に武者小路実篤や志賀直哉らが広めた熱い人道主義と理想に燃えた白樺派の運動による白樺材のイメージアップの影響と日本アルプス登山のブームに支えられて、大正末には白樺細工の商品形成の基礎が固められていた。

梓川村に住んでいた藤野忠清（一九〇〇～一九九〇）は一九二七年（昭和二）ごろ、松本駅前の店頭で販売されはじめた白樺材のみやげ物と白樺派の運動の流行から都会にも販路を広げる可能性を見定め、白樺細工製造販売卸の藤野忠清製作所を創業した。藤野は東京をはじめそのほかの都市の百貨店・運動具店・書店・文具店に売り込み、彫刻や彩色の職人を養成し、新商品作りに取り組んだ。一九三一年（昭和六）には北海道から台湾までの販売網を築いている。

松本白樺工芸の最初の登山人形を発案したひとりである彫刻家清水湧水（一八八五～一九七三）や高木伴十郎ら制作者と松本駅前で販売していた松田国太郎らは、藤野に刺激されて、本格的に白樺細工に取り組むようになった。専業の彫刻・彩色職人、建具関係の額縁製造者・ロクロ細工や木の実細工などの新商品の製造者・白樺材の取り扱い業者・専門の問屋などが整備されていった。一九三一年（昭和六）ごろには、独自の大規模な販売網を確立した藤野に対する反発から、松田国太郎は清水湧水らと三九名で松本白樺睦会を結成、対抗勢力として商戦を展開していく。一九三七年（昭和一二）日中戦争がはじまると、白樺細工でも兵隊のみやげや慰問袋用のものも生産されるようになった。しかし一九四一年（昭和一六）ごろになると戦時体制は深刻化し白樺業界から脱退する企業も多くなる。そうした中でも、傷病兵の温泉保養所のみやげ店は繁盛し、白樺細工の需要があった。さらに、物資不足の中、全国的なみやげ品の産地となっていた松本の白樺関係の問屋へは注文が殺到している。

（2）戦後

戦後は、一九四五年（昭和二〇）松本市内に進駐した米兵のためのみやげ品の売店の商品として白樺細工も選定された。一九五〇年（昭和二五）朝鮮戦争が勃発すると、在日米軍向けのみやげ物店には白樺細工の風景額や木彫の風俗人形・動物類が並んだ。このときの米軍関係者が日本みやげとして持ち帰った白樺細工が発端となって輸出ブームに火がつく。また日本の復興が進み、生活が豊かになってくると新しい販路の進展などから松本の白樺細工は白樺工芸品と総称されるようになり、洗練されていった。

しかし一九五五年（昭和三〇）秋ごろから輸出ブームが去っていくと業界のターゲットは観光地に向かっていった。昭和三〇年代半ばころからはじまったレジャーブームにより新興観光地の開発が進んで売店が増加した。しかし昭和四〇年代になるとレジャー時代の若者の嗜好からかカラフルな色彩の「いわゆる「ファンシー」まがいの小物類」がみやげ物の市場に数多く出回りはじめた。行楽客のみやげ物の嗜好は多様化し、一九七〇年（昭和四五）の「万国博」を頂点に白樺工芸の売れゆきは低迷してくる。

一九八二年（昭和五七）松本の白樺工芸品は、長野県の第一回目の伝統的工芸品に選定された。しかし松本白樺工芸連合会は時代の潮流には勝てず、松本商工会議所によれば、二〇〇一年（平成一三）ごろ解散している。

二　登山人形

（1）登山人形の概要

登山人形は前述したとおり生産が止まっており、白樺材自体が虫がつきやすく保存に向かないため古いものを入手することも難しく、その全貌を紹介することはできない。しかし現在までに筆者が調査した登山人形を数点紹介したい。（写真1）の山付登山人形は、二〇〇六年（平成一八）に松本駅前の松田商店で筆者が購入したものである。制作年は定かではないが、平成に入ってからの作品だと考えられる。登山者には色はついていない。（写真2）は藤野忠清の子息である藤野力の家で拝見したもので、戦争の直前か戦後間もなく

に制作されたものと考えられる。三段になっており、登山者に着彩が見られる。（写真3）には2点入っているが、どちらも藤野力の所有で、山付の方は、山肌に黒色で風景が描かれている。となりの登山人形は全体が黒色に染められている。この登山人形の材質は白樺ではない。

登山人形も手がけ、現在も話ができる数少ない職人の一人田之上豊によれば、登山人形は丸彫で、制作に高い技術を要するので、すべての職人が手がけるわけにはいかず、登山人形専門の職人がいたそうである。特に杖を彫るのが難しく、そのほかの部分がうまくいっても杖で失敗しないように神経をとがらせたと語ってくれた。登山人形の中でも山付は人気があり、よく売れたとのことである。

写真3 山付登山人形と登山人形（黒）藤野力蔵

写真2 山付登山人形 藤野力蔵

写真5 井口良一 登山人形試作中の清水湧水

写真4 井口良一 試作用デッサン

(2)松本白樺工芸の登山人形のはじまり

登山人形は、井口良一とその友人で彫刻家である清水湧水が、井口が一九一五年（大正四）に上高地に開業した宿舎「上高地養老館」のみやげ物として、考案したのが最初である。『松本白樺工芸品業界の歩み』（松本白樺工芸連合会会長小林進、一九九一年）によれば、はじめは一九一六年（大正五）頃、登山する人だけを彫ったもので、養老館を訪れていた外国人に見せたところ売れたので、山の土産になったということである。井口良一が一九二二年（大正一一）から二四年（大正一三）頃描いたとされる白樺細工の試作用のデッサンなどが残っている（写真4・5）。これらの描写には動作の一瞬一瞬を生き生きと伝えようとする写実への意欲が感じられる。また、清水の登山人形を彫りおこすことへの奮闘ぶりも伝わる。

次に、登山人形の制作をはじめた井口良一と清水湧水について概観したい。まず、最初に登山人形を考案した井口良一であるが、一八八五年（明治一八）岐阜県恵那郡三濃村に生まれ、濃尾大地震に遭って一八九三年（明治二六）一家で松本に移り住んでいる。松本中学校二年生在学中に退学し、フランス仕込みの明るい写実的な画風で明治中期から美術画壇を風靡した黒田清輝が主宰する白馬会溜池洋画研究所に一九〇二年（明治三五）に入所して洋画を学びはじめた。しかし一九〇六年（明治三九）、母の死去にともなって呼び戻され、白馬会を退所して帰郷、きぬと結婚した。この年藤原紫遷に師事して日本画を学んでいる。その後もフランス語と写真を学ぶなど、芸術に関する勉学にいそしみ、一九一一年（明治四四）には黒田清輝夫妻を松本に迎えている。一九一五年（大正四）には日本山岳会の会員となった。また一九一九年（大正八）、松本美術会の結成に参加している。山岳登山を好み、山を愛した人物であったが、上高地の養老館の経営が諸事情で不可能になると、松本第二中学校で図画を教えて生計をたてた。そのほか豊科高等女学校・松本商業学校などでも教鞭をとった。一九四四年（昭和一九）に没している。

一方井口の友人である清水湧水は、一八八五年（明治一八）立川流の彫刻家清水虎吉の長男として松本市に生まれた。父に立川流の木彫を学び、主に欄間の制作など、社寺や屋台の彫刻に腕をふるっている。長野県宝である里山辺須々岐水神社お船祭の西荒町のお船や、松本市重要有形文化財である岡宮神社の東町二丁目舞台などが代表作として知られている。一九三八年（昭和一三）の第一九回松本美術会展の彫刻工芸部門に出品したという記録もある。戦後も伝統的な彫刻家として木彫工芸美術の振興に貢献した。一九七三年（昭和四八）に没している。登山者を対象にした登山人形の丸彫は、この清水湧水の影響が強いと考えることができる。そして、名だたる偉人や宗教に関係なく、ただ山を登る人物の写実的な描写は、白馬会で学んだ井口が身につけていた洋画の写実精神ということができるだろう。

(3)山付登山人形の成立

藤野力が所持している白樺細工の初期にあたる一九三〇年（昭和五）の製品の見本写真（写真6）によると、藤野製作所のものには山付登山人形が複数掲載されている。いっぽうそれと同じころ、一九三一年（昭和六）の開業当時の松田国太郎・清水湧水らの松本白

写真6 1930年（昭和5）頃の藤野製作所見本

写真７　1931年（昭和6）の開業当時の清水湧水側の見本

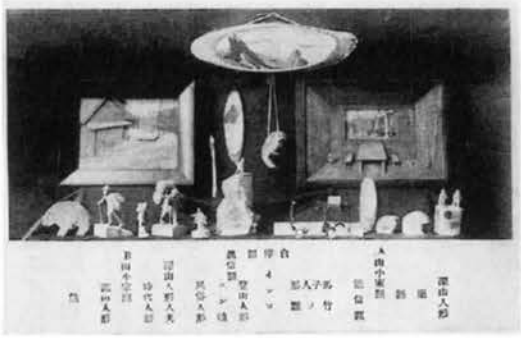

写真８　清水湧水側の山付登山人形が入った見本

樺睦会の製品の見本写真（写真７）には山付登山人形が掲載されていない。ただ清水湧水側の別の製品写真（写真８）には山付登山人形が一点掲載されていることから制作はされていたことがわかる。しかし、このことから山付登山人形のオリジナルは清水湧水ではなく、藤野忠清側の職人の手になるものと推測される。昭和初期に藤野のところに集まった職人は、藤野力によれば、ちょうど世の中が不況のころであったので、大工や彫りもの師も含まれていた可能性が高いことから、山付登山人形には日本の彫り物の伝統が影響していると言うことができる。それにしても、山付きの登山人形のイメージはいったいどこから来たのだろうか。

三　西欧の写実の受容と名もない山岳風景を造形するということ

明治時代以前、「山水画」では、蓬莱山や、文人や仙人、神が住んでいたとされる深山幽谷や物見遊山で訪ねられた名所の型どおりのイメージが繰り返し表現されることが主であった。

本格的に名もない風景が描かれるようになったきっかけは、工部美術学校でのイタリア人教師、フォンタネージの洋画教育にあった。彼は一八七六年（明治九）の工部美術学校開設から病のため辞任する一八七八年（明治一一）まで熱心に教鞭をとり、すぐれた教育者であった。そもそも日本では、筆法の修得や手本の臨写に終始するばかりで、身近な光景を忠実に描写して絵画に仕上げるという習慣はなかった。そのような状況のなかで、モデルを使った人体写生を行い、名もない戸外の風景の鉛筆描写を奨励したフォンタネージの教育が、画家に身近な風景を発見させ、自然風景の写生に大きな影響を与えたのである。このことは単に画家だけではなく、造形にかかわるすべての者の自然観を覆す画期的な出来事であったと言えよう。

風景描写のなかでも山岳風景の造形化には、自然に恵まれた信州の自然の発見が深く関与している。そしてその信州の自然の発見は、政府が西洋文明の日本への導入のため、諸外国から招いたお雇外国人らを先頭に進めた測量や植物採集のための山岳調査、やはり外国人が率先して進めた山歩きや純粋な楽しみとしての登山の発展と、切ってもきれない関係にあった。また、一八九四年（明治二七）に国民の心を国土愛にむけることを目的として書かれた志賀重昂（しがしげたか）の『日本風景論』の高い売れ行きと評判も、人々の目をそれまで何の注目も浴びなかった自然にむけさせる大きな要因となっている。さらに明治後期以降の山岳会の発足や、小島烏水など、山岳登山の愛好家の記した登山記も、山岳の魅力を広く世の中に知らしめるのに大きな効を奏した。また島崎藤村や国木田独歩らが進めた文学上の自然主義なども風景の発見に一役かっている。

この期をきっかけに変化していった日本人の意識がやがて、名もない登山者の写実的な立体造形を求める嗜好につながり、山も彫り出すという発想は、かつて宮大工や彫り物師でもあった職人の、日本の伝統的な造形を支えた技術と、置物や根付などに見られる西欧にはない山の表現に親しんでいた見識から生まれたのではないか。

おわりに

写実には、西欧の自然観が必要であった。描く自分と自然（描く対象）を客観的に切り離してみることが不可欠であったのである。その上に、描く自分と自然（描く対象）を融合させる、主体と客体を対立させない昔ながらの職人の形式的表現が合体してはじめて、山付登山人形は誕生した。

明治維新以降、それまでの造形に携わってきた職人ではなく、名のある芸術家を尊重する考え方が本格的に西欧から導入された。一九〇七年（明治四〇）はじめて政府が主催した美術展である文部省美術展覧会が象徴するのは、そういった芸術至上主義である。西欧の芸術思潮を取り入れた芸術家たちは、生命感の表出を、そしてやがて日本独自の表現を目ざして写実的な表現から離れ、作風は抽象化していった。

しかし庶民の間には、現在の食玩やフィギュアの人気を支えるような写実志向の文化があったのである。山付登山人形は、名のある芸術家ではなくみやげ物作りの一職人の手によって、ことさら格式ばることなく制作され、いわゆる高価な芸術品とはちがい西欧の芸術至上主義に左右されることもなく広く庶民の手に手軽に渡っていったことが、人気の秘けつだったとも言えよう。

山付登山人形は白樺の素朴な丸彫による造形であるが、その形態は、日本の伝統的な立体造形の技術と見識、写実という西洋のものの見方が組み合わさって初めて生れた、まさに近代化推進の申し子であったということができるだろう。（敬称略）

（長野県信濃美術館　学芸係長）

山と博物館　第54巻　第8号
二〇〇九年八月二十五日発行
発行　〒398-0002　長野県大町市大町八〇五六－一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一－二二－〇二二一
FAX　〇二六一－二二－二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL://www.cityomachi.nagano.jp.sanpaku
印刷　大糸タイムス株式会社
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三二九三

R100　PRINTED WITH SOYINK
この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。